

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	原口 碧 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】	要 旨
論文題目	15世紀フランス王国の宮廷文化における「東方」の表象 —ヴァロワ朝ブルゴーニュ家とアンジュー家を中心に—	<p>15 世紀フランスの宮廷文化において、聖地エルサレムやイスラム文化圏、ビザンツ帝国などを指す東方世界が、特異な意味合いを帯びて表象された。本論文は、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ボンとアンジュー公ルネの宮廷を対象に、こうした「東方」の存在の諸相と意義を、政治・文化的観点から論じるものである。</p> <p>第1部では、東方に対するイメージの形成過程をたどり、両家の歴史的背景と宮廷にもたらされた東方の情報や文物について考察した。ブルゴーニュ公は、東方を征伐すべき異教の地として捉え、自身を十字軍のイニシアティブをとる君主としての姿に見立てた。その狙いや「東方」観は、所有する多数の関連書物に反映されている。それに対してアンジュー公は、継承したエルサレム王の称号の維持に精力を注ぎ、宮廷には、異教徒としての東方よりも、所領の港町マルセイユを介してもたらされた舶来品の存在の方が際立っている。会計簿への調査を通して、所有する服飾品や調度品、動物など多彩な東方の文物に関する実態が明らかになった。他方で、ブルゴーニュ公の外交官ベルトランドン・ド・ラ・ブロキエールの東方旅行記を考察し、豊かな服飾描写や旅の土産品によって、ブルゴーニュ宮廷への東方文化の伝播の一例を見出した。</p> <p>第2部では、宮廷の祝祭空間における東方の表象について、4つの事例の考察を試みた。ブルゴーニュ公の事例では、十字軍への誓いが行われた「雉の祝宴」について、色彩の象徴という観点から論じた。神の恩寵に与るブルゴーニュ公の十字軍が、トルコに脅かされた教会を救い出すという構図が、色によって巧みに暗示されていた。アンジュー公の事例では、騎士道祝祭と聖史劇を対象に、異国的モチーフの演出の意義について分析した。フランス国王を前にした、エルサレム王位強調による立場の対等性の主張や、異教世界や東方にまつわる古の英雄像を利用した権威づけなど、催しの背景に注目しながら異なる表象の意図を提示した。「東方」を軸として両者の比較をすることにより、それぞれ固有の歴史観や外交政策が浮き彫りになった。しかし、目的や背景は異なっていたが、東方の表象は、両者に共通して権威を演出する機能を果たしていたと言える。</p>
審査委員	(主査) 教授 徳井 淑子	
	教授 安成 英樹	
	教授 新井 由紀夫	
	教授 宮内 貴久	
	首都大学東京 教授 河原 温	